

山東出兵・・・満州・蒙古の利権を守り、中国革命に敵対

中国では、国民党の指導者蒋介石は中国共産党と協力して、国内の統一をめざしました。そして、1927(昭和2)年3月、上海南京を占領し、南京に国民政府をつくりました。日本の田中義一内閣は、蒋介石の北伐が進むと、満州の鉄道や鉱山などの利権がおびやかされるとの口実で、1927年から28年にかけて、3回も山東省に軍隊を出兵しました。

済南城のバリケードにこもる日本軍



(写真出典『日本の歴史 6』ほるぷ出版)

昭和恐慌・・・満州は日本の生命線」の気運を高めた

大根をかじる子ども

1930(昭和5)年、アメリカからはじまった世界大恐慌の波が日本に押し寄せ、昭和恐慌とよばれる深刻な不況におちいりました。都市では会社や工場がつぶれ、賃金は下がり労働時間は引き延ばされました。

失業者の多くは農村に帰りましたが、農家は生糸や米など農産物の値段が下がったため、生活に苦しみました。欠食児童や、農村での娘の身売りが大きな社会問題になりました。

その後、失業と生活苦に悩む国民は、「満州は日本の生命線」として満州に送り込まれ、中国の植民地支配を担わされることとなりました。



満州事変・・・中国東北部「満州」にたいする侵略

1931(昭和6)年9月18日、満州にいた日本軍(関東軍)参謀らは、奉天郊外の柳条湖で南満州鉄道の線路を自ら爆破しておきながら、これを中国軍のしわざだといって中国にたいする武力侵略を開始しました。政府は初め、戦いを拡大しない方針を示しましたが、陸軍は戦線をひろげ満州全土を占領しました。1932年3月、日本はかいらい国家として「満州国」をつくり、清の最後の皇帝溥儀を執政とし、日本の役人を送り込んで、政治・経済軍事の実権をにぎりました。日本は、満州を「王道楽土」とすると宣伝し、恐慌に悩む農民を日本国内から集団的に移住させました。

皇帝溥儀夫妻



(写真出典『日本の歴史 7』ほるぷ出版)

線路の現場検証



奉天城に入った日本軍

